

東南アジア系移民をめぐる台湾社会の変遷と共生の課題

— 包摂に向けた文化活動の可能性 —

細井 一葉*

キーワード

移民、文化活動、社会的包摂、多文化共生

目次

- | | |
|----------------------------|--------------------------------------|
| I はじめに | 7 文化活動の活発化 |
| II 東南アジア系移民の概要 | 8 東南アジア系移民の増加に伴う社会構造の変容 |
| III 台湾の東南アジア系移民に関する先行研究の整理 | IV 考察 |
| 1 東南アジア系移民の受け入れ | 1 東南アジア系移民の包摂 |
| 2 東南アジア系移民の生活適応 | 2 文化芸術分野における議論の進展 |
| 3 結婚移民に対する支援政策 | 3 東南アジア系移民をめぐる社会的矛盾 |
| 4 差別・偏見が生まれる構造 | 4 文化活動を通じた新たな関係性—台湾原住民族と東南アジア系移住労働者— |
| 5 人権意識の高揚 | V 今後の課題と展望 |
| 6 東南アジア系移民の位置付けの変化 | |

I はじめに

台湾では、1980年代から1990年代にかけて本格化した労働力不足や少子高齢化などを背景に、東南アジアの国々から移住労働者や結婚移民が受け入れられてきた。年々その数は増加傾向にあり、彼らの労働環境や人権擁護、差別偏見に関する議論は台湾で注目を集め、社会問題化されてきた。近年では、経済発展や外交政策などの観点から、彼らを包摂した「多文化社会」の構築が目指されているが、台湾社会では東南アジアからの移民に対する否定的な印象は依然として存在している。そうした移民に対する固定観念を取り払い、いかにして共生していけるかが課題となっている。台湾では、移住労働者や結婚移民に対する認識を深めるため、「東南アジア文化」や「労働者」をテーマとした文化活動が開催され、文化芸術の側面から交流を目指していく取り組みが見受けられる。

そこで本稿では、東南アジア系移民をめぐる先行研

究に基づき台湾社会の変遷と現況を整理した上で、東南アジア系移民の理解促進を目指した文化活動の動向に着目する。文化活動を通じた台湾社会の東南アジア系移民に対する働きかけ、及び東南アジア系移民による自文化の表現の実践に着目し、それらが可能となる社会的要因を探る。最後に、「共生」という課題の対応に向かう上で、台湾で行われる文化芸術を通じた包摂を掲げる文化活動はいかなる可能性をもつのか展望する。

II 東南アジア系移民の概要

本稿で取り上げる台湾に暮らす東南アジア系移民は、移住労働者と結婚移民に大別される。まず呼称について確認しておきたい。台湾では、1980年代または1990年代以降台湾に新しく流入してきた人口として、移住労働者、結婚移民、留学生などが「新移民」という語で表される（田上 2015、沼崎 2012）。

* 名古屋大学大学院

そのうち、移住労働者は、台湾では「移工」と呼ばれる。これは、日本や欧米諸国などの国々から来たホワイトカラーの仕事に就く労働者とは分けて考えられていることが特徴で、主にブルーカラーの職種に就く労働者を指す。移工には大きく2つの職種があり、その内訳は「社福移工」と呼ばれる台湾人家庭での介護、施設での介護などの分野と「産業移工」と呼ばれる漁業、工業、建設業、製造業、農林業などの分野である。労働部（日本の厚生労働省に相当）の統計によると、2025年時点での移住労働者数は約85万人に達している。これは台湾の全人口の約4%を占める数である。移工の主な出身国は、インドネシア、ベトナム、フィリピン、タイなどであり、移住労働者のジェンダー、出身国、職種は相互に密接に関係している。

社福移工は、インドネシア出身者が大半を占め、ほぼ女性である。産業移工は、ベトナム、フィリピン、インドネシアの順に多く、男性労働者がその多くを担っている。そのうち、インドネシア男性労働者は主に漁船での労働、ベトナム男性労働者は工場での労働、タイ男性労働者は建設業に就いている¹。

結婚移民は、海外から結婚を目的としてやってきた女性移民を指す。当初、「外籍新娘」（新娘とは花嫁の意）や「外籍配偶」（配偶とは配偶者の意）と呼ばれた。以下で述べていく通り、台湾への結婚移民は仲介業者を通じて紹介を受けるビジネスの一環として扱われたことがあった。そうしたネガティブな状況や外国籍であることをことさらに強調する呼称が人権侵害につながるとして、次第に呼称が変わり、現在とはともに台湾社会を作っていく住民を表す「新住民」という語が使われるようになっていく（日暮 2018）。主な国籍を見ると、結婚移民のうち約6割が中国大陆出身者であり、その次にベトナム、インドネシア、香港・マカオ、フィリピンとなっている。ただし、新住民は、言語・文化的な違いにより、台湾社会で生活する上での問題が生じやすい東南アジア出身者を表すことが多いことに留意したい。

本稿では、関連する政策や先行研究で使われている用語や文脈に応じて、これらの呼称を使用することとする。

III 台湾の東南アジア系移民に関する先行研究の整理

本稿で着目する台湾の東南アジア系移民に関する文化活動の展開に至るまでの台湾社会の変遷を追い、東南アジア系移民が既存の研究においてどのような視座で取り上げられてきたのかみていく。

1 東南アジア系移民の受け入れ

(1) 移住労働者の受け入れ

台湾では1980年代²、1990年代頃から、建設、製造、介護などの分野で東南アジア諸国から労働者の受け入れがなされてきた。1980年代以降、建設業を中心に人手不足の問題が顕在化し、1990年代に入って、建設業分野でタイから建設労働者を受け入れたことが公式な単純労働者受け入れの始まりである（佐野 2004）。その背景には、1980年代後半では、経済成長や高等教育の普及により、台湾人の労働価値観が変化したことがある。特に台湾人のサービス業志向の高まりにより、労働環境や労働条件が過酷な職種（いわゆる3K）は敬遠され製造業、建設業の労働力不足が深刻となった。加えて、国内投資や重大公共事業の拡大により、単純労働者が不足したため、補完的に労働者を受け入れる政策が打ち出されてきた（江 2015）。また、女性の社会進出に伴って、政府や女性団体の間では、家事・介護労働における女性の負担軽減を社会に求める動きも高まった（佐野 2004）。さらに、1992年には、「就業服務法」が施行され、非専門職・非熟練労働分野への外国人労働者の受け入れが本格的に制度化されるようになった（中川 2021）。従来の建設業及び製造業分野に加えて、家内労働・福祉サービス・農業分野においても、外国人労働者の雇用が認められた。施行当初は、製造業分野においてタイ人、フィリピン人労働者が多数を占めたが、1990年代から2000年代にかけては介護・看護分野においてインドネシア、ベトナムからの労働者が増加した（佐野 2004、中川 2021）。

(2) 結婚移民の受け入れ

台湾では、1970年代末から1980年代初期にかけて、

¹ 天下雑誌「移工的定義是什麼？在台灣，外勞和移工有什麼差異？」<https://opinion.cw.com.tw/blog/profile/31/article/11554>（2025年9月20日最終閲覧）

² この時期には、東南アジアからの外国人不法就労者が存在していたと言われる。

1949年に国共内戦から撤退した国民党の退役軍人が配偶者選びの困難に直面した。兵士はスパイ活動の懸念から従軍中の結婚を制限されており、退役後には婚期を逃していたからである(横田 2021)。台湾に居住する東南アジア華僑³による仲介で、退役軍人に対してフィリピン、タイ、インドネシアから女性が紹介されたことが国際結婚の始まりである。そのうちの多くが華人系であった。その理由は、台湾人男性とある程度意思疎通が可能であったためである⁴。1980年代以降に東南アジア諸国への投資が奨励されたことに伴い、両地域の人的交流が進み、台湾人男性と外国人女性の結婚も増加した(ウ 2011)。農村部の出身であり、文化や言語、生活習慣の違いが少ない華人女性が多くを占めていた。さらに、台湾においては、工業化、台湾人女性の高学歴化と社会進出の高まりに伴い、農村部では台湾人女性が都市に流出する現象がみられた。中でも農業や漁業に従事する台湾人男性や、身体上に問題を抱える台湾人男性たちは結婚市場で相手を見つけることが難しくなった。特に家の存続に対する観念が根強く残る農村部では、結婚相手を見つけるため、仲介業者を通じた国際結婚が増加していった(江・陳・黄 2004、ウ 2011)。1990年代では、中国大陆またはベトナム、インドネシア、フィリピンなどの東南アジア地域からの移民女性との結婚が著しく増加し、若く華奢な体型で貧しい地域の出身の女性が好まれたのであった(ウ 2011、横田 2021)。

結婚移民の半数以上の割合を占める中国大陆出身者との婚姻の歴史的経緯についても触れておきたい。1980年代以降、兩岸(台湾海峡を挟む中国大陆と台湾)の親族訪問が解放され、退役軍人の多くが故郷である中国大陆で妻を探した。その後1990年代以降は、兩岸の民間交流が段階的に解放された。この時期に、ビジネスや観光、留学で中国大陆を訪れる人も増え、それに伴って台湾の男性と中国大陆出身の女性の婚姻も増加したのである(江・陳・黄 2004)。

既存の研究では台湾人男性と外国人女性との結婚の特徴に関する分析が蓄積されてきた。例えば、台湾における国際結婚について、社会学の立場から結婚移民運動と研究を行ってきた夏(2018)は、台湾の国際結婚について次のように述べている。

相対的に低発展の国家の女性が相対的に高発展な国家へと嫁ぐグローバルな現象の一部である。(省略)資本主義発展は中心・半周辺・周辺の間には不平等な国際分業をつくりだすとともに、それぞれの国家内にねじれ発展を生み出す。「商品化された国際結婚」はねじれ発展によって周辺化された両端の男女が資本のグローバル化と労働の自由化のなかで、国際結婚に借りて活路を求めた結果である(夏 2018: 253)。

同じく社会経済学的観点から研究を進めた王宏仁は、国際結婚が、国際的な労働力移動の潮流下で国家間の所得格差によって引き起こされた現象であること、さらに結婚移民は台湾内部の二重の生産力(productivity と fertility)を補完していることを指摘した(王 2001)。

加えて、江・陳・黄(2004)とウ(2011)の研究に照らすと、台湾人男性と外国人女性の国際結婚について、以下の点をまとめることができる。

① 当事者の教育レベルの低さ

国際結婚をする台湾人男性と外国人女性の学歴は、いずれも台湾の平均水準よりも低い傾向にある。

② 台湾における居住地域

国際結婚をする台湾人男性は都市部ではなく、比較的地方部に暮らす割合が高く、結婚後の居住地も都市部以外であることがほとんどである。

③ 夫婦の年齢差

結婚移民女性の方が台湾人男性より年齢の低い傾向にある。

④ 国際結婚当事者の社会的・経済的地位の低さ

国際結婚をする台湾人男性は収入が少ない傾向にあり、妻となる外国人女性も働きに出る必要性が生じる。だが、言語や学歴の障壁や家庭での育児のため、就業が困難となり単純労働に限られてしまう。そうした理由により職業選択に制限がかかり、家庭が経済的に脆弱であるため、社会的弱者になりやすい。

2 東南アジア系移民の生活適応

移民の受け入れが進むにあたって、台湾での生活適応の問題や受け入れに関する制度的・構造的問題が研

³ 東南アジア華僑のうち、1950年代から1960年代にかけて台湾に留学した元留学生や一時的に台湾に移住していた人々(横田 2021)。

⁴ インドネシア華人に言及した横田によると、客家語での意思疎通が可能であった(横田 2021)。

究されてきた。

(1) 移住労働者

① 過酷な労働環境

移住労働者をめぐっては、彼らが直面する労働環境について議論されてきた。移住労働者は台湾人に忌避される重労働や長時間労働を課されており、契約の範囲を超えた労働を強いられることがある。雇用主による虐待、性的暴行や、生活環境における衛生状態の悪さなども報告されている（梁 2019）。特に、移住労働者の失踪が問題視されてきた。彼らの多くは住み込みの介護労働や漁船労働であり、生活空間は閉ざされたものとなる。失踪発生の要因として、鄭（2020）は雇用主・仲介業者・労働者の三者が緊張状態にあることを指摘した。鄭によると、労働者の受け入れ政策は台湾の雇用主や仲介業者にとっての「利益最大化・コスト最小化」を目指し、「即戦力」となる労働者を効率よく受け入れようとするものであった。そのため、労働者の立場の相対的な弱さ、労働内容への不満、仲介業者の不誠実な対応が労働者に失踪を選択させるという構造を生じさせている。移住労働者や雇用主のニーズが十分に配慮されない体制がそれぞれに負担をかけ、三者間の関係の悪化が生じることを明らかにした（鄭 2020）。

② 労働条件と人権侵害

特に台湾人家庭での住み込みが前提となる家事・介護労働者に対しては、強制労働や減給、プライバシーなどの問題が議論に挙げられてきた。村上（2021）によると台湾では「日本以上に少子高齢化が進んできており、台湾人よりも賃金が安く、住み込みで看護や介護のみならず家事もこなしてくれる移住労働者の需要は増加する一方であった」とされる。しかし、住み込み移住労働者には労働基準法が適用されないため、同法が定める最低賃金も適用されないどころか、看護・介護という仕事の性格上、休日もほとんどないことが多いという（村上 2021）。こうした家事・介護労働者の労働基準法の除外について、政府は、家庭での労働は、勤務形態が一般企業とは異なるため、家事・介護労働者を労働基準法の対象とするのは困難であると説明している（傳 2020）。

(2) 結婚移民

結婚移民の生活上の問題に関しては数多くの研究がなされた。1990年代には、東南アジア出身女性との

結婚が急増し、中国大陆出身者と比べて、言語・文化・生活習慣の違いから生活に支障が生じやすいと考えられる同地域出身者が議論の焦点となった。その頃来台した結婚移民のうち、多くの割合を占めていたベトナム人女性を事例にした研究もみられる。江・陳・黄（2004）、李・張（2004）、ウ（2011）の研究では次のような問題が指摘された。

① 文化、生活上の適応問題

外国から来て慣れない環境の中で、文化の異なる食習慣や風習を理解できず、ホームシックや憂鬱さを感じる。

② 言語的コミュニケーションの問題

夫婦間や家族間で言語的コミュニケーションの壁が生まれ、結婚関係に影響を及ぼすほか、子どもの養育にも問題が生じる。

③ 家庭内暴力

国際結婚をした台湾人男性の多くは、社会的・経済的に恵まれない状況に置かれており、自身よりもさらに弱い立場にあるとみなす女性を妻として迎える傾向にある。彼らは結婚相手に育児や家事、自分の家族の介護を要求する。一方、結婚移民女性も国家間の経済的格差を背景に国際結婚を通じて夫からの経済的支援を受けることを目的としている場合がある。そのため、家庭内の権力関係が傾きやすい。また、夫婦間・家族間の言語の壁や文化的差異により、良好な関係が築けないことが、夫から妻に対する差別的な扱いや精神的、肉体的暴力へとつながる。地方部への居住や夫への経済的依拠、移民法の規定による社会福祉への制約も絡み、夫から暴力や不当な扱いを受けても声をあげられない。

④ 経済的困窮

国際結婚をする台湾人男性は、台湾社会において低所得層に位置付けられるほか、心身に障害を抱えている人が多いため、安定した収入を得ることが難しく家庭全体が困窮する傾向にある。

⑤ 社会的ネットワークの不足

結婚移民を受け入れた台湾人男性の家族は、結婚移民へ家庭以外の接触を制限することがある。そのため、地域社会との接点が少なくなる。また、結婚移民の母国からのサポートが不足している場合が多く、育児や社会への適応で困難を感じることになる。

⑥ 子どもの教育

台湾では子どもの教育は母親に任されることが多いとされている。しかし、外国出身の母親は台湾とは異

なる文化的・言語的背景をもつため、一般の台湾人家庭と比べて子どもの教育に差が出るということが言われてきた。例えば、子どもに読み書きを教えられないことで、子どもたちの発達に遅れが出ることや、母親の文化が抑圧されていることから子ども自身のアイデンティティにも問題が生じることが議論された。経済状況が良くない家庭が比較的多いことで、子どもの健康状態や教育に支障が出ることも懸念された。言語・文化的な背景の違いや、多くの結婚移民が若年出産であること、夫が心身の健康上の問題を抱えたケースが多いという点から、子どもの発達に影響が出ると論じる研究も見られる。

こうした国際結婚が直面する問題は、過去の研究において、台湾社会の人口構造や家庭内構造、結婚観に与える影響が大きくあるものとして、国際結婚家庭の子どもたちの健康面、教育面に対する文化的素養の欠如や人口の質の低下を懸念するという見方がなされた。中には、優生学的な問題として捉え、台湾人女性は多産を望まない傾向があるのに対して、国際結婚を選択する台湾人男性の中には、健康上の問題を抱える者がいることと結婚移民女性の多産傾向が結びつき、不健康な胎児や発達の遅れがある子どもが誕生するのではないかと危惧する言説が含まれていた。結婚移民は、将来の人口構造に悪影響を及ぼし、台湾の国際的競争力を阻害するというのである。並びに、結婚移民の中には偽装結婚や売春をする事例もあることを指摘し、国家の安全や社会的秩序を脅かす恐れがあることも問題視されたのであった（江・陳・黄 2004）。

先行研究では、以上のような観点から、結婚移民の流入は台湾の人口の質を低下させていく可能性があるという点に帰結し、次項で取り上げるような、結婚移民の社会適応を促し、彼らを統合していく社会福祉政策に関する議論へと展開されていく。特に、東南アジア系の移民のうち最も台湾の人口構造に影響を与える可能性があるのが結婚移民であり、このまま人口の増加が続くと問題が大きくなるとして、いかに台湾社会へ溶け込んでもらうかという観点から政策がとられていく（李・張 2004、ウ 2011）。

3 結婚移民に対する支援政策

結婚移民（新住民）への支援政策の変遷をみていくと、1999年、台湾内政部は「外籍新娘生活輔導実施計画」（外国人花嫁生活指導実施計画）を策定した（横田 2021）。2000年代に入ると、結婚移民に対する支援体制が急速に進められていき、特に彼らの台湾社会への統合を促し、自立した生活を送ることを目的とした支援が始まった。例えば、2003年には、「外籍與大陸配偶照顧輔導措施」（外国籍及び大陸配偶者ケア指導措置、2016年に新住民照顧服務措施へと改称）が制定された。2005年には「外籍配偶照顧輔導基金」（外国籍配偶者ケア指導基金、2016年に新住民發展基金へと名称が変更された）が設置され、結婚移民に対する助成制度が整えられた⁵。

このような支援政策では、東南アジア出身女性の教育程度が比較的低い傾向にあることから、結婚移民自身に対する教育支援が重視された。これには、結婚移民による家庭教育が子どもたちに不利なものとならないようにとの思いも込められた。そのため、教育部では「外籍及大陸配偶子女教育輔導計畫⁶」（外国籍及び大陸配偶者子女教育指導計画）が策定されたほか、「外籍配偶終身學習體系中程計畫・草案」（外国籍配偶者向け生涯学習制度中期計画・草案）が立案された。その中では、結婚移民のために生涯学習のシステムを築くこと、台湾でのスムーズな適応を促すこと、自己に対する価値観を高めるエンパワーメント、個人・家庭・社会の発展を図ることが目的とされた。その実施内容は、結婚移民とその家庭で学習に関するいかなる必要があるのか研究を進めて相応の課程を開発し、専門の教師を育成すること、国際結婚家庭を対象とする生涯学習活動と多文化教育を実施すること、東南アジアとの国際文化交流を推進することなどであった（ウ 2011）。政策の実施当初は、主に結婚移民に対する言語教育に重点が置かれた。その理由として、結婚移民にとっては帰化申請要件を満たすために中国語学習が重要課題であったこと、結婚移民の多くは家庭内で母国語を使用することを制限され孤立する傾向にあったことなどから中国語の教育の必要性が認識されたためである（高橋 2019）。

2010年頃になると、小中学校に占める新住民第二

⁵ 内政部移民署「新住民照顧輔導」<https://www.immigration.gov.tw/5385/5388/7178/223704/>（2025年9月20日最終閲覧）

⁶ 山脇啓造「第51回 韓国と台湾の統合政策」<https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/column/contents/117138.php>（2025年9月20日最終閲覧）

世代（台湾人男性と結婚移民女性の子）の増加を受け、彼らをいかに台湾社会に適応させるかという問題が表面化してきた。同時に、支援対象は結婚移民からその子どもたちへと転換していった。教育部は2012年に「新住民火炬計画」（新住民松明プロジェクト）を打ち出した。これは新住民重点学校という国際結婚で誕生した児童が一定数在籍する学校にて、児童の多文化的背景に配慮しながら教育支援を行うというものである（横田 2021）。このプロジェクトでは東南アジアの言語を学ぶカリキュラムの導入や多元文化講座などが実施され、新住民第二世代に向けた東南アジアの言語・文化の学習が推進された（横田 2021）。2019年には、東南アジア7か国の言語（ベトナム語、インドネシア語、タイ語、ビルマ語、クメール語、タガログ語、マレー語）が「新住民語」として小中学校のカリキュラムに導入された（温 2022）。

当初の結婚移民をめぐる政策論では、彼女ら自身に一早く台湾の社会・文化に溶け込んでもらい、偽装結婚や家庭内の衝突の発生を抑え、子どもの養育に関する問題と台湾社会の質の低下という課題を軽減させていく必要性が唱えられたのであった。そのために、識字教育のほか、就労権、健康保険や身分証に関わる法制度も整備された（江・陳・黄 2004）。その後は、家族機能を維持するため、台湾社会全体で結婚移民女性の重要性が高まっていることが認識され（高橋 2019）、同化を促すのではなく、彼女らの文化を尊重し包摂していく方向性へと進んでいる。そのことは、多元的な文化を尊重し、東南アジアの言語や文化の学習を促すような子どもたち世代に対する教育支援の形からもわかる。

4 差別・偏見が生まれる構造

東南アジアからの労働者や結婚移民とその第二世代の増加が続いたことで、台湾社会では彼らの人権に関する問題も浮かび上がってきた。依然として台湾社会で問題となっているのは、東南アジア系移民に対する差別と偏見である。移住労働者や結婚移民をめぐる差別・偏見とその階層化について、Lan（2006）と夏（2018）の研究をもとに台湾で東南アジア系移民に対する偏見が構築されてきたプロセスやそのメカニズムをみておきたい。

(1) 移住労働者（外国人労働者⁷）

当初、台湾で外国人労働者は「外勞」（外籍勞工、外国人労働者の略）という語で、差別的に表現されてきた。この呼称は、階級的・人種的な意味合いをもつ。主に、東南アジアから来た3D労働（きつい、汚い、危険の特徴を備えた労働。日本語の3K労働に相当）に就く外国人労働者を指す。つまり、「外勞」という語は、東南アジアの人々は、危険・汚い・屈辱的な仕事に適している人々であるという認識を暗示するものであった（Lan 2006）。Lanによると、台湾における外国人労働者に対する人種的な蔑視の風潮は、台湾住民や他民族との関係において構築されてきたという。台湾社会では、人種的、文化的特徴といった要因だけでなく、社会的地位や職種によっても人と人の間に階層的な差異を見出し、外国人労働者を「劣った他者」としてみなしてきた。つまり、外国から来る労働者の中には、ホワイトカラーの職種に就く者もいるが、そちらに対しては人種的な蔑視は生じておらず、東南アジアから来た主にブルーカラーの職種に就く労働者だけが人種的な区分の対象とされてきたというのである（Lan 2006）。

この背景を考えてみよう。台湾のマジョリティである漢民族の文化史において、人々は、日本、ヨーロッパ、北米からの移民に対しては、ホワイトカラーの職業に就く、国の経済発展や文化的豊かさに貢献しうる人材と位置付けてきた。一方で、ブルーカラーの移民に対しては、外国人労働者と呼び、ある種の植民地主義的な視線でとらえてきたという。このような台湾における外国人労働者への人種化された軽蔑や差別的なまなざしについて Lan は、台湾の原住民族と台湾ナショナリズムという歴史的背景を交えて言及している。現在台湾の住民を構成する多くは中国大陆からの移住者である漢民族である。一方、台湾にはオーストロネシア語族系の民族的・言語的特徴を持つ原住民族も居住する。原住民族は長らく植民地主義的な視線の対象とされ、台湾住民のマジョリティである漢民族から野蛮な他者として蔑視されてきた。しかし、1990年代に国際社会における台湾の自立性の確立の必要性が高まり、ナショナリズムが強く要請されたことなどを背景に、原住民族は「新台湾人」を構成する主要な構成員として台湾社会に包括された。しかし、1990年

⁷ 先行研究で使用されている語に基づいて、東南アジア系労働者を表す「外勞」（外国人労働者）が差別的な表現であったことが論じられている際には、この語を用いる。

代以降、かつて原住民族に向けられていた人種的に劣位にあるという人種差別的な言説が、外国人労働者に重ねられるようになってきているというのである (Lan 2006)。

さて、台湾で外国人労働者の雇用が合法化されてから、特に衛生に関する問題が注目された。家事労働者や介護労働者に代表される外国人労働者たちの衛生観念や生活習慣の特徴は、台湾社会において、彼らの生活は衛生状態が劣悪で、衛生観念の乏しい人々であるとの見方を助長してきた。メディアによるエイズなどの感染症のニュースの報道と、東南アジアは「未開」、「後進的」であるとの否定的イメージが結びつけられ、そうした外国人労働者の衛生習慣は、すべて彼らの道徳心が低いことの表れであるとも言われてきたという (Lan 2006)。つまり、こうしたメディアによる報道は、東南アジアからの労働者を衛生観念や道徳観念が乏しい軽蔑すべき他者として描き、台湾を危険にさらしているとして台湾住民の不安を掻き立てるものであったといえる (Lan 2006)。

さらには、台湾社会は、外国人労働者を「犯罪率の上昇を引き起こす」、「労働倫理を欠いた人々」とみなし、個人の犯罪や行為を部分的に解釈し、人種化してきたという。例えば、男性労働者には暴力犯罪者、女性労働者には性的な倫理観の低さなどといったイメージが結びつけられてきた。こうして、雇用主は移住労働者に対して、衛生面や道徳面での清潔さを求め、政府も移住労働者を監視下に置くことで管理してきた (Lan 2006)。

移住労働者の受け入れには、仲介業者が重要な役割を果たしてきた。移住労働者が台湾で敬遠される仕事に就く外国人として蔑視されてきたことはすでに概観してきたが、この背景について Lan (2006) は、仲介業者が労働者の民族的・国家的偏見を作り上げ、労働者を階層化したと論じる。Lan によると、台湾では、雇用主は、移住労働者を斡旋する仲介業者から提供される情報に基づいて、労働者の選考を行ってきた。仲介業者は、東南アジアに向いて人材を集め、労働者を国籍、年齢、学歴、宗教、体型、肌の色などに基づいて分類して台湾の雇用主に売り込む。このような傾向には制度上の理由がある。台湾政府は移住労働者の受け入れ政策を外交の手段としており、労働者の採用や一時停止は、政府の規制や国別の措置に左右される。すなわち仲介業者は、刻々と変化する国の情勢に応じるために、財政的なリスクを最小化できるよう、国ご

とに異なる戦略や手続きを取る「生産ライン」を整備しておく策をとっているためである (Lan 2006)。さらに、仲介業者は以下に説明するような組織的な採用、訓練を通して、台湾の雇用主に合うようなプロフェッショナルな使用人を育成してきたことが明らかにされている。

台湾の雇用主の間では、フィリピン人は賢いが手に負えない、インドネシア人は愚かだが従順であるというようなイメージが付与されてきた。これを Lan は言語的資本の差異によって説明する。フィリピン人の場合は母国における平均の教育水準が高い傾向にあり、特に英語が堪能である。そのため、フィリピン人労働者は英語力を活かし、労働者として与えられる以外の業務をこなしたり、雇用主と交渉したりする能力がある。だが、フィリピン人労働者との英語での意思疎通に苦勞する雇用主もいるため、台湾で優位性の高い言語であるとみなされている英語を話すフィリピン人労働者は、雇用主である台湾人にとって扱いづらいと言われる。一方で、インドネシア人労働者に対しては、権威主義的な統治に置かれてきた、イスラム教の慣習に基づく国家であるという認識を背景に、従順で忠実さがあるというイメージが抱かれると指摘される (Lan 2006)。

実は台湾の仲介業者は移住労働者の採用戦略において、台湾の雇用主に共有されるこうした人種的イメージを強調することで高い利益を上げてきた。つまり、仲介業者は国ごとに作り上げられた、フィリピン人は賢いが手に負えない、インドネシア人は愚かだが従順であるといったステレオタイプに沿って、雇用主にとって望ましい特性を持つ国の労働者を採用している。例えば、インドネシア人を仲介する業者は、フィリピン人労働者に対抗するため、インドネシア人労働者に従順さを訓練する。労働者の逃走が問題となると、従順な労働者を輩出するため、地域の固定観念に基づいて、インドネシアの貧しい村落の質素で勤勉な女性を採用し、語学や労働倫理などのトレーニングをする。また、インドネシア人労働者の中には、従順なイメージを満たすため意図的に出自や個人情報を偽装する者もいるという。また、台湾向けの訓練では服装、髪型、マナーなどを管理し、規律の正しさを身につけさせる。Lan (2006) によれば、こうした出身地域や信仰する宗教といったものに基づく集団ごとのイメージは、異なる国籍をもつ人々の間での競争意識も生み出してきたという。

仲介業者は以上のような採用・訓練・紹介というプロセスや、マーケティング戦略の中で国籍による民族イメージを形成し、移住労働者の民族的・国民的特徴を誇張しつつ構築してきたといえる。

上で見たことをまとめてみよう。台湾社会において東南アジア出身の労働者は、劣悪な衛生観念、文化的後進性、犯罪志向などのイメージと結びつけられ、劣った他者としてみなされてきた (Lan 2006)。さらに、彼らは日本、ヨーロッパ、北米といった地域からの移民との関係性において、その社会的地位や職種により劣位にあるものとして人種化、階層化されてきた。また、メディアや仲介業者により助長される民族的偏見も、台湾社会で共有される移住労働者に対する否定的なイメージを構築する要因になったといえよう。より重要なのは、仲介業者によって民族的に階層化された移住労働者内部の差異や人種的イメージが、移住労働者自身によるステレオタイプの演出とも相まって、労働市場における移住労働者間の対立を生み出し、台湾住民や他の国籍の移民との関係によって人種化された境界を強化した点であろう。さらにそのことは、台湾住民が国籍ごとに抱くステレオタイプをいっそう強化する結果にもつながったと考えられる。

(2) 結婚移民

結婚移民についても、仲介業者の斡旋によって台湾人男性との国際結婚が行われてきた。東南アジア出身の結婚移民が見られるようになった1980年代初、仲介業者が結婚移民の人権を無視し、人身売買のようなビジネスを展開していたことが、彼女たちに台湾社会が抱くネガティブなイメージを与えることとなった。

夏 (2018) は結婚移民のイメージについて、マスメディアによる報道を分析し、台湾では「外国人花嫁」現象が社会問題として構築されてきたことを明らかにしている。夏によると、結婚移民の訪台目的について「売春目的の偽装結婚」であると解釈されている点や、外国人花嫁が家庭の破綻をもたらしたり、家出したりするという点を台湾のマスメディアは強調してきたという。また、外国人花嫁をめとった台湾人男性を社会に必要とされていない存在として描写し、国際結婚は次世代の人材の質の低下を招く脅威となりうるということが報道されてきた。さらに、外国人花嫁に対してマイナ

スのイメージが付与されていく背景には、権力を有するマスメディアや行政によって、国際結婚の当事者たちの声が抑圧された構造があることを論じた (夏 2018)。

以上で見てきたように、台湾では東南アジア系移民を「劣った他者」として位置付けてきた。そこであがえたのは、マスメディア、仲介業者がもつ偏見が東南アジア系移民に対する否定的な固定観念を生み出してきたという事実である。移住労働者や結婚移民は台湾社会で生じている社会問題の根源であるというマスメディアの報道や、仲介業者がマーケティング戦略の一つとして生み出した国籍ごとの民族的イメージは、東南アジア系移民に対する理解を歪め、台湾社会の中で広く共有される土壌を提供してきたといえよう。

5 人権意識の高揚

2000年代に入り、草の根レベルで移住労働者や結婚移民・二世に向けた支援を行う団体が設立され、彼らの権利擁護を訴えると同時に、台湾政府に対策を講じるよう求めてきた。移住労働者の支援の取り組みについて論じた村上 (2021) は、移住労働者支援を積極的に行っている民間団体の一つとして台湾国際勞工協會 (TIWA) を紹介している。台北に事務所を構える TIWA は移住労働者問題の解決に取り組む台湾初の NGO である。村上によると、TIWA では、主に3つの活動が行われている。1つ目は労働者自身のエンパワーメントを目的としたサービスの提供であり、法律相談、労働争議交渉、労働教育、労働者組織結成援助がある。2つ目は、文化交流によって社会的弱者である移住労働者の声を広める活動である。3つ目は、より公正で公平な労働政策を提唱し、国会への陳情活動やデモ行進、国際的ネットワークの構築を促進することである (村上 2021)。

また、結婚移民のエンパワーメントを目指す団体も誕生してきた。1990年代当時、台湾の大学院生であった夏曉鵬氏 (現在は国立政治大学社会工作研究所教授) によって、結婚移民の識字教育を目的とした「外籍新娘識字班」(外国人花嫁識字教室) が設立された。この団体を前身とする「南洋台湾姉妹会」は、東南アジアからの結婚移民によって設立された台湾初の NGO であり、学習支援から、移民女性の社会参加、エンパワーメント、政策改革までさまざまな活動に取り組ん

でいる⁸。

こうした権利団体は抗議活動を通じて台湾政府に働きかけ、政策や関連する規則、法の改正に影響を与えている。

6 東南アジア系移民の位置付けの変化

1980年代の受け入れ開始当時から、次第に東南アジア系移民の存在は台湾で社会問題化されてきたが、政府による対外政策の転換は、台湾における彼らの位置付けを大きく変えてきた。1994年に台湾政府は「南向政策」を開始したほか、2016年には、「新南向政策」が実施された。当初の南向政策はアジア地域への経済投資に重点を置くものであったが、新南向政策では、経済投資だけでなく、東南アジア地域との文化・教育・人材面での交流を促進し、ASEAN 諸国や南アジアなどの国々と新たな経済共同体意識を形成することが目的とされた（日暮 2018）。ここでは、中華人民共和国への経済依存から距離を置き、「アジア太平洋の多元的な台湾」の実現を目指して教育、文化面での人材育成が重視された。具体的には、特に東南アジア出身の新住民の社会的地位の向上に重きが置かれた（玉置 2020）。新南向政策では、東南アジア系新住民やその二世を、台湾が東南アジア諸国との関係強化を進める上での文化的優位性を有する貴重な人材であると位置付け、彼らが多元的文化を体現するその優位性を発揮し、台湾の対外政策の担い手となってもらうことが期待されたのである⁹。

7 文化活動の活発化

2000年代以降からは、結婚移民に向けた中国語学習や、子どもたち世代に向けた東南アジア言語学習だけでなく、移民の文化的背景や子どもへの文化継承も配慮されるようになった。政府や機関、労働者や結婚移民の権利や保障に関心を寄せる各地方自治体、民間団体、NGO などでも、文化を重視した支援活動が展開されている一方で、移民の中でも団体を組織し、文化芸術の公演を行う人々もいる。「東南アジア」に関連する展示、食べ物、舞踊、音楽などの文化活動が多く見受けられるようになってきている。

8 東南アジア系移民の増加に伴う社会構造の変容

東南アジア系移民の数は年々増加し、人口構造や家庭構造、社会の多層化などの多くの課題をもたらし、常に社会問題化されてきた。

台湾の経済成長や少子高齢化の進行、それに伴う移住労働者や結婚移民の増加は、社会の格差を助長するものとなっている。台湾社会の構成員を表す「族群」すなわちエスニシティと社会階層に焦点を当て、社会の多元化と多層化について論じた沼崎（2012）は、新たな格差が発生しているとして、経済格差、ジェンダー格差、文化格差を取り上げた。1990年代以降台湾社会の複雑性が増し、東南アジアからの新移民はジェンダー文化や食文化、言語使用の面から台湾のエスニック構造を一層複雑にしていることを論じた。また沼崎（2014）は、新移民がもたらした新たな問題として「文化的格差」を指摘し、文化の相違や無知が彼らに不利益をもたらしていると述べている。

先行研究でも論じられてきたように、移住労働者や結婚移民は、経済的に低所得層に位置付けられるほか、ジェンダー的役割を顕著に表している存在である。そうした格差は文化的格差へも影響して、社会の階層化が進行している。

IV 考察

ここまで、先行研究を整理することで、台湾社会で起きた東南アジア系移民をめぐる状況の変化を概観してきた。そこで明らかになったように、2000年代以降の台湾社会では、東南アジア系移民の包摂に向かう運動が広がっている。本章では、まず東南アジア系移民への理解促進を目的とした活動が展開される背景にある社会的要因を分析し、文化芸術的側面における相互理解の実践への注目の高まりについて言及する。次いで、東南アジア系移民を包摂した社会の構築が謳われるものの、東南アジア系移民と台湾住民の間の距離感が存在している実態について論じる。最後にそうした矛盾した状況の打開を目指す文化芸術の表現を通じた歩み寄りとは可能なのか、原住民族による実践にも触れつつ考察したい。

⁸ 南洋台湾姊妹會「南洋台湾姊妹會：關於我們」<https://tasat2003.org/>（2025年9月20日最終閲覧）

⁹ 行政院經貿談判辦公室／經濟部國際貿易局「新南向政策 參考資料」<https://newsouthboundpolicy.trade.gov.tw>（2025年9月20日最終閲覧）

1 東南アジア系移民の包摂

まず、ここでの包摂とは、台湾社会への一方的な同化を求めるのではなく、多様な文化をもつ住民が共存し、共に社会を作っていくことを目指す態度である。こうした動向のいくつかの動機について、次の3点を提示しておきたい。

(1) 「台湾」の国際化を支える存在としての東南アジア系移民

受け入れ開始当初から台湾社会において「他者」として排除されてきた東南アジア系移民だが、2000年代以降、彼らは台湾政府にとって、外交政策において文化的・経済的連携を強化しうる人材であり、社会の発展や維持に必要な人材と位置付けられていると言える。さらに、東南アジア系移民は多文化国家としての台湾を構築していく上でも、重要な文化的多様性をもたらす存在とみなされているとみることができる。とりわけ、中国大陸（中華人民共和国）との間で政治的問題が複雑化する中にある台湾では、国際社会に向けて台湾独自の文化の多様性を発信することが必要とされており、それを体現する一つの要素として東南アジア系移民の存在が取り上げられていると理解できるだろう。

(2) 東南アジア系人口の増加と社会的役割の重要性

台湾政府の統計によると、2025年時点で、台湾の移住労働者は約85万人に達し、結婚移民は約60万人に上る。国際結婚家庭、移民二世も含めるとその数は、現実問題として無視できない存在となった。台湾では既存の社会的システムや政策ではカバーできない労働力不足が問題になっているほか、家庭内の家事や介護といった役割を移民に頼らざるを得ない社会構造があることも指摘されており、とりわけ東南アジア系移民の担う役割の重要性が認識されつつある。

(3) ほかの社会運動との連動

2000年代以降の東南アジア系移民にまつわる支援活動や社会運動は、台湾政治の民主化とグローバル化の潮流の中で、客家の文化継承運動や女性支援などの社会運動を展開する民間団体が東南アジア系移民に注目し始めたことから派生していった（高橋 2019）。結

婚移民への活動に参与する台湾住民は、結婚移民に対する抑圧と台湾社会で原住民族や客家人が周縁化されてきた歴史を重ね、共感をもって活動に関わっているという（高橋 2019）。

このように、台湾社会の民主化やグローバル化の中で展開してきた社会運動と連動して、東南アジア系移民への注目も高まり、移民包摂の運動が実施されてきたといえる。これは、単なる労働力の需要のみならず、台湾政府の外交戦略や多文化政策、台湾住民による社会・民主化運動、さらに「台湾人」アイデンティティの形成といった事態と深く絡み合っていると考えられる。こうした背景から、台湾住民や東南アジア系移民自身による、東南アジア系移民に対する差別や固定観念の是正を唱える動きがみられるようになった。

2 文化芸術分野における議論の進展

台湾で繰り広げられる東南アジアをテーマにした文化活動について論じる先行研究も増えており、台湾社会の東南アジアの文化に対する関心の高まりがうかがえる。

東南アジア系移民に関する文化活動には、展示、支援交流活動、文化芸術の公演などがあり、政府機関や民間団体との協力によって行われてきた（張 2016）。例えば、台北市に位置する国立台湾博物館では、2022～2023年にかけて特別展「百年対話：跨國移動者與藏品の相遇」（100年の対話：国境を越えた移住者と収藏品との出会い）が実施された。この展示のキュレーターである袁氏によると、展示を通じて、台湾博物館は東南アジア系移民コミュニティや専門家と協力し、東南アジア文化や労働者への理解と尊重を社会に向けて訴えることを目的としたという（袁 2024）。台湾博物館では、こうした展示のほか、移民の舞踊や音楽団体の公演も開催されている。袁氏は、台湾博物館の文化活動について、「移住労働者の芸術団体との協力によって、彼らは各地で公演を行うようになり、やがて多くの場所を回るようになった。また、東南アジア諸国の記念日を祝うことが徐々に習慣になり、文化を理解しようという動きが進んでいる。だが、時には、理解がある人もいればそうではない人もいて、偏見が生じることもある。移住労働者はまじめに台湾で働いているのに、偏見をもつ人が彼らのイメージを損ねるこ

とがある。それでも、文化交流は少しずつ進んでいると感じる。」と述べる¹⁰。

東南アジア系移住労働者の演劇に焦点を当て、芸術の分野において労働者演劇の歴史と発展を概説した林 (2024) によると、労働者演劇では、移住労働者の国際移動、過酷な労働経験や搾取の実態などの苦境が描かれてきた。また、台湾における労働者演劇は、民間や政府の支援を受けることで発展しており、移住労働者の声を発信する重要な手段となっているという。こうした草の根レベルの文化活動は、移住労働者に交流の機会を提供するほか、政府機関の資金提供や法改正を実現するなど政治にも影響を与えてきた (林 2024)。

東南アジア系結婚移民による文化パフォーマンスについて分析した研究には、邱 (2008) がある。邱 (2008) は、台北市の小学校で行われた、異文化体験を通じて子どもたちの相互理解を育むことを目的とする多文化週間という取り組みに参加した結婚移民を対象として、彼女らの主体性の構築について考察した。歌、舞踊、講演などのパフォーマンスを通して、学校で子どもや教師、保護者に受け入れられることで自信を深め、人間関係にも良い変化が見られたことを邱は言及している (邱 2008)。

また、台湾では東南アジア系移民による文化芸術の実践や彼らが形成するコミュニティの活動及びその発展が注目されつつある。パフォーマンスアーツの団体が結成されているほか、文芸、ファッションショー、音楽、武術などの多岐にわたる活動がある (林 2024)。母国の伝統文化の継承や故郷への郷愁の解消、台湾社会への母国の文化紹介などを目的とした舞踊や音楽などの文化表現が実践されている。

3 東南アジア系移民をめぐる社会的矛盾

以上で示してきた通り、台湾では東南アジア系移民に対する支援活動や彼らを巻き込んだ文化交流活動が実施されてきた。それに伴う形で彼らに関する雇用状況の改善や規則改正が進められてきたものの、彼らが精神的な面で抱える問題の改善には課題が残っている。

最も大きな課題は、東南アジア系移民と台湾住民とが隔絶されていることである。介護労働や工場・漁船での労働に従事する多くの東南アジア系移住労働者は、職場以外ではほとんど一般の台湾人と接することがない生活を送る。例えば、台湾の大都市では、東南アジア人系移民が集まる東南アジア人街が形成されている。こうしたエリアには、東南アジア料理店や商店が立ち並び、彼らの生活や食文化が色濃く反映されている。台湾において東南アジア人街の存在感は確実に増大しているが、そのような空間に台湾人が訪れることはほとんどなく、台湾社会から隔絶された空間とも言えるだろう。

また、新住民二世 (結婚移民と台湾人男性の家庭に生まれた子) の間では、母親が台湾社会で受けてきた差別や偏見を恐れ、母親のようにならないようにと、自分のルーツを隠すこともある。また、国際結婚をした両親もかつての結婚移民に対するネガティブなイメージから、子どもに母親の母国語や母国の文化を学ばせる必要がないと考えることもあるという¹¹。あるいは、たとえ母親の文化、言語を知っていたとしても、クラスメイトに軽蔑されることを恐れて、人前でそれらを表現しない二世もいる¹²。

台湾社会で展開されてきた東南アジア系移民を包摂するための政策の後押しもあって、移民の権利擁護や生活面の向上が目指される一方、長きにわたって台湾社会で共有されてきた東南アジア系移民に対する否定的なまなざしは、台湾社会と東南アジア系移民の距離感を依然として生み出しているといえるだろう。

ここまで見てきたように、台湾は移住労働者や結婚移民を包摂し、彼らと共生していく社会を実現する方針へと向かっている。しかし、ごく一般的な台湾住民にとって東南アジア系移民は、台湾住民の生活と密接に関わりながらも目を向けられることの少ない存在、自分たちのすぐ隣にいても隔てられてしまった存在となっている。こうした状況は現在の台湾が抱える社会的矛盾の一つであると言える。

台湾社会は、このような社会的矛盾をどう乗り越えていけるかという課題に直面している。多文化共生という課題に向かう台湾社会にとって、東南アジア系移

¹⁰ 2025年9月に袁緒文氏から口頭で教示を得た。

¹¹ 劉苑杉「誰是新二代？新住民子女在台灣的處境與成長」<https://opinion.cw.com.tw/blog/profile/31/article/12208> (2025年9月20日最終閲覧)

¹² 天下雜誌「素人，也有被肯定的時候！一群新住民媽媽的台灣夢」<https://event.cw.com.tw/diageo/article02.html> (2025年9月20日最終閲覧)

民による文化活動はどのような可能性をもつだろうか。同時に、台湾社会は「台湾」としてのアイデンティティをどのように描いていくのだろうか。

4 文化活動を通じた新たな関係性—台湾原住民族と東南アジア系移住労働者—

台湾原住民族の中には、東南アジア系移住労働者の抱える問題に関心を持ち、文化活動を展開する人々がいる。ここでは、台湾原住民族アーティストの活動を紹介したい。

Suming 舒米恩は、1978年に台湾台東に生まれたアミ族の男性であり、2000年代から音楽活動を開始した。彼は、アミ族の言語で制作した楽曲「Aka Pisawad (諦めないで)」で台湾の最も権威のある賞である金曲賞の最優秀楽曲賞を受賞したほか、「阿米斯音楽節 Amis Music Festival」を開催するなど、原住民文化の振興に尽力してきた。Suming 舒米恩によると、1970年代以降の台湾では多くの原住民族が故郷を離れ、漢族系住民の経営する田畑での農耕や遠洋漁業、建設業に従事するようになった。彼の父も外洋漁船に乗っていたことがあるといい、彼は台湾で東南アジア系移住労働者が置かれた状況を理解しようとする際、自分の父親世代が台湾で経験した状況と重ねるのだという。彼自身は、東南アジア系移住労働者についてそれほど深く理解しているわけではないが、故郷を離れて、不慣れた環境で働く彼らの境遇に共感することができるという。彼は、台湾で開催されるイード・アル=フィトルや移工音楽會（移住労働者音楽祭）に参加し、音楽の関わりを通して、移住労働者に寄り添ってきた¹³。

過去に台湾では、音楽作品や音楽祭などの活動を通じて、原住民文化に対する注目と理解が高まってきた。東南アジア系移住労働者の問題に関して、Suming 舒米恩は、文化の理解から始めて移住労働者の認識とつながりを生み出すことができると信じていると述べる。「私が過去に知っていた（東南アジアからの）移住労働者は、非常に閉鎖的な環境で生活していた。介護士として働く人、工場で働いている人もいれば、漁船で働く人もいて、それらはいずれも一般の台湾人が近づく機会がない場所だった。移住労働者たちは、仕事が忙しく、なかなか台湾を知る時間がないことから、

台湾を知ってもらうにはどうすればよいかも考える必要がある¹⁴」と Suming 舒米恩は述べる。

今日の台湾社会において、原住民族の位置付けは確固たるものとなっている。かつては差別の対象であった原住民族だが、1990年代以降は、多文化的な「台湾アイデンティティ」を象徴する存在とみなされている。その背景には、長きにわたって台湾で実践されてきた原住民族文化運動や、台湾の民主化、本土化の高揚がある。Suming 舒米恩の活動からもわかるように、台湾原住民族と東南アジア系移住労働者の関係性は、台湾社会が取り組む文化芸術の表現を通して社会的少数者の包括へと向かう文化活動の実践を考える上で重要な視点であるといえるだろう。

V 今後の課題と展望

本稿で概観した通り、台湾の東南アジア系移民に関する先行研究では、マクロな視点からグローバル化の潮流における人の国際移動の要因が分析されてきた。初期には主に移民研究の枠組みで、社会学的なアプローチから労働者の労働条件や雇用実態、結婚移民の生活の適応に焦点が当てられてきた。その後、台湾で東南アジア系移民が社会問題化されてくると、社会統合の必要性から展開されてきた政策や教育に関する研究や、ジェンダーや制度的なメカニズムの観点から移民内部の階層化や否定的かつ人種的・民族的になされるラベリングに着目する研究もなされた。2000年代以降の台湾社会では、東南アジア系移民に対する人権擁護や支援活動、文化交流活動が活発化をみせている。しかし、受け入れ当初から共有されてきた移民に対するネガティブなまなざしは、台湾住民と彼らとの間に小さからぬ距離感を生み出しており、台湾社会は東南アジア系移民といかに共生していくかを考える新たな局面を迎えている。台湾の研究者による論考では、台湾で展開される東南アジアに関する文化活動や芸術に焦点を当てたものもあり、これらが東南アジア系移民に付与された固定概念の改善と彼らの文化への理解を促進し、移民自身の自己表現の場となっていることが言及されつつある。

本稿IV章で論じたように、台湾で推し進められる東南アジア系移民の文化活動には、台湾が置かれている

¹³ One-Forty 「專訪舒米恩 Suming：先認識移工，才有可能喜歡」 <https://one-forty.org/tw/blog/suming>（2025年9月20日最終閲覧）

¹⁴ 注11と同様。

政治的状況や国際的な評価に対する力学が働いており、政府による後押しも大きく関連している。また、このような環境が移民自身による文化芸術の表現を可能にしている側面もあるといえるだろう。

グローバル化の影響による人の移動に伴って、人と人との対立や軋轢は世界各地で議論の焦点となっており、そうした社会に対抗する手段として、文化表現の営みにはますます注目が集まっている。こうした動向に照らして考える時、台湾でなされる台湾住民及び東南アジア系移民による文化活動に着目することは、社会課題を乗り越えるための文化表現の在り方を問い直すことにつながるだろう。台湾では東南アジア系移民の認識を深めることを目的とする文化活動が広く展開されているが、それらを対象とした研究には次のような課題が残されているといえよう。一つには、文化活動の創作のプロセスにおいて、台湾住民と東南アジア系移民の間でどのような協働やコミュニケーションがなされているのか、誰のどのような経験や動機が文化活動に反映されているのか、また文化活動を見る者にとってそれらがどのように受け取られていくのかを検討し、社会の反応を包括的に分析していく必要があるだろう。さらに、台湾住民及び東南アジア系移民によって東南アジアの文化がいかに表象されているのか、文化活動の場で形成された文化表象やそこで実践される文化表現は従来の台湾住民と東南アジア系移民の間の相互理解や関係性にいかに影響するのか、文化活動は社会全体でいかに機能していくのか検討していく余地もあるだろう。他者との共生を目指す社会において、包摂と排除という二つの姿勢の間で、台湾社会で進められる文化芸術の実践は共生の手段となりうるのか、今後も注目していきたい。

参考文献

(日本語文献)

ウ シンイン

- 2011 「台湾における結婚移民女性に関する動向と支援策」『東京大学大学院教育学研究科紀要』50: 23-33。

夏 曉鵬 (著)、前野 清太郎 (訳)

- 2018 『「外国人嫁」の台湾 グローバリゼーションに向き合う女性と男性』東方書店。

江 秀華

- 2015 「台湾における外国人労働者の受け入れについて——実態および政策調査」『城西 現代政策研究』8(1): 61-70。

佐野 哲

- 2004 「台湾の外国人労働者受入れ政策と労働市場」『ディスカッションペーパー』一橋大学経済研究所229。

高橋 萌

- 2019 「台湾における新移民支援の展開とその拡大要因に関する考察」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』87: 1-18。

田上 智宜

- 2015 「四大族群と新移民——多文化主義による台湾の社会統合」東京大学大学院総合文化研究科、博士論文。

玉置 充子

- 2020 「台湾の対東南アジア関係の進展と社会の多元化」『拓殖大学台湾研究』4: 29-57。

鄭 安君

- 2020 「台湾における外国人介護労働者の失踪問題——制度的弱者のジレンマと「総弱者化」の進行」『移民政策研究』12: 148-164。

中川 雅貴

- 2021 「台湾における外国人受け入れの動向と影響」『厚労科研報告書』1: 166-173。

沼崎 一郎

- 2012 「社会の多元化と多層化——1990年以後のエスニシティと社会階層」沼崎一郎・佐藤幸人 (編)『交錯する台湾社会』(研究双書600)、pp. 37-68、アジア経済研究所。
2014 『台湾社会の形成と変容——二元・二層構造から多元・多層構造へ』(人文社会科学ライブラリー第3巻) 東北大学出版会。

日暮 トモ子

- 2018 「台湾における新住民子女の教育の現状と課題——外国につながりをもつ子どもの教育保障の在り方に着目して」『目白大学総合科学研究』14: 23-34。

村上 雄一

- 2021 「台湾における移住労働者の権利擁護——コロナウイルス禍におけるインクルージョン (包摂) 事例から」『日本の科学者』56(9): 378-383。

横田 祥子

- 2021 『家族を生み出す——台湾をめぐる国際結婚の民族誌』春風社。

(中国語文献)

傅 柏翔

- 2020 「外籍家庭看護工重要労働権利保障和救済之多重困境分析——一個法與社會研究視角之初步反思」『交大法學評論・勞動法特刊』133-175。

江 亮演・陳 燕禎・黃 稚純

- 2004 「大陸與外籍配偶生活調適之探討」『社區發展季刊』105: 66-89。

李 瑞金・張 美智

2004 「從文化觀點探討東南亞外籍配偶在臺灣之生活適應」『社區發展季刊』105: 101-108。

梁 莉芳

2019 「結構性脆弱的悲歌：外籍漁工的日常工作與健康經驗」『人文及社會科學集刊』31(2): 263-300。

林 雯玲

2024 「以戲劇作為方法：臺灣移民工劇場 發展初探(2009-2020)」『戲劇研究』33: 75-122。

邱 淑雯

2008 「女性移民的社會參與：台北市國小多元文化週外籍母親的文化展演 研究成果報告」南華大學國際暨大陸事務學系亞太研究所碩士班。

王 宏仁

2001 「社會階層化下的婚姻移民與國內勞動市場：以越南新娘為例」『台灣社會研究季刊』41: 99-129。

溫 思妮

2022 『開外掛』迴遊式創作集。

袁 緒文

2024 「以臺博館2022年「百年對話：跨國移動者與藏品的相遇」特展為核心所建構之研究網絡」國立臺灣博物館。

張 文馨

2016 「新住民文化展示中的認同與再現：以《艷驚四方：當代台灣異鄉人創作巡迴展 及越南文物》展覽為例」『博物館與文化』11: 83-123。

(英語文獻)

Lan, Pei-Chia

2006 *Global Cinderellas: Migrant Domestic and Newly Rich Employers in Taiwan* Durham: Duke University Press.

(参照ウェブサイト)

山脇 啓造

「第51回 韓国と台湾の統合政策」、<https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/column/contents/117138.php> (2025年9月20日最終閲覧)

勞動部

「勞動統計查詢網」、<https://statfy.mol.gov.tw/index12.aspx> (2025年9月20日最終閲覧)

劉 苑杉

「誰是新二代？新住民子女在台灣的處境與成長」、<https://opinion.cw.com.tw/blog/profile/31/article/12208> (2025年9月20日最終閲覧)

南洋台灣姊妹會

「南洋台灣姊妹會：關於我們」、<https://tasat2003.org/> (2025年9月20日最終閲覧)

內政部移民署

「新住民照顧輔導」、<https://www.immigration.gov.tw/5385/5388/7178/223704/> (2025年9月20日最終閲覧)

「外僑居留人數統計」、<https://www.immigration.gov.tw/> (2025年9月20日最終閲覧)

天下雜誌

「移工的定義是什麼？在台灣，外勞和移工有什麼差異？」、<https://opinion.cw.com.tw/blog/profile/31/article/11554> (2025年9月20日最終閲覧)

「素人，也有被肯定的時候！一群新住民媽媽的台灣夢」、<https://event.cw.com.tw/diageo/article02.html> (2025年9月20日最終閲覧)

行政院經貿談判辦公室／經濟部國際貿易局

「新南向政策 參考資料」、<https://newsouthboundpolicy.trade.gov.tw> (2025年9月20日最終閲覧)

One-Forty

「專訪舒米恩 Suming：先認識移工，才有可能喜歡」、<https://one-forty.org/tw/blog/suming> (2025年9月20日最終閲覧)